

第1回企画

日本解剖学会 男女共同参画推進委員会

男女共同参画推進ランチオンセミナー

「女性研究者をどう育てるか？」

「日本の女性研究者をどう育てるか？
私の個人的な経験から」

演者：廣川 信隆

(東京大学大学院医学系研究科分子構造・
形態学／細胞生物学講座 特任教授)

「女性研究者が
活き活きと活躍するために」

演者：郷 通子

(大学共同利用機関法人 情報・システム
機構理事／前 お茶の水大学 学長)

座長：江崎 太一 (東京女子医科大学 医学部 解剖学・発生生物学講座・教授)

仙波恵美子 (和歌山県立医科大学 医学部 解剖学第二講座・教授)

日時 平成26年

3月27日(木)

12:00~13:00

(先着200名 無料昼食券あり)

会場 自治医科大学

地域医療情報研修センター
中講堂(B会場)

同日開催

交流セッション

「女性研究者の
未来を語る会(仮称)」

司会：仙波 恵美子
(和歌山県立医科大学 医学部
解剖学第二講座・教授)

今城 純子
(防衛医科大学校 再生発生学講座・教授)

演題：「私が歩んできた道(仮題)」

演者：郷 通子

廣川 信隆(コメンテーター)

日時：同日 18:30~20:30

会場：自治医科大学 医学部 キャンパス内
健診センター1階 レストラン ラボ

会費：当日：4,000円

*事前申し込み：3,000円(前日までに
今城純子宛て：imaki@ndmc.ac.jp)

主催：日本解剖学会 男女共同参画推進委員会

協力：第119回 日本解剖学会総会・全国学術集会

廣川 信隆 先生

略 歴



昭和 46 年東京大学医学部卒業、1 年間の脳神経外科研修後、解剖学教室へ入局し、医学博士を取得。昭和 54 年より渡米し、カリフォルニア大学リサーチフェロー、ワシントン大学准教授を経て、昭和 58 年帰国し 37 歳で東京大学医学部解剖学教授に就任。以降、細胞骨格および細胞内モーター蛋白に関する研究を精力的に継続中。平成 22 年からは同大特任教授。第 32 代日本解剖学会理事長（平成 13 年～19 年 3 月）。平成 11 年から日本学士院会員、平成 23 年文化功労賞顕彰。

抄 録

我が国では、諸外国に比べ女性研究者、特に PI (Principal Investigator) になる研究者が、まだまだ少ない。このような現状の中で、女性研究者をどう育てるかについて、私の個人的経験を踏まえて皆様と議論したいと思っている。

郷 通子 先生

略 歴



昭和 37 年お茶の水女子大学理学部物理学科卒業、昭和 42 年名古屋大学にて理学博士を取得後、コーネル大学化学科に 3 年間留学。帰国後昭和 48 年から九州大学理学部助手を経て、平成元年名古屋大学理学部教授に就任。平成 8 年から名古屋大学大学院理学研究科教授、東京大学分子細胞生物学研究所客員教授。平成 15 年に長浜バイオ大学バイオサイエンス学部の学部長・教授。平成 17 年にお茶の水女子大学学長就任。平成 21 年より大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構理事。平成 14 年内藤記念科学振興賞、平成 16 年中日文化賞、平成 20 年第 8 回日本進化学会賞／木村資生記念学術賞（木村賞）など受賞。

抄 録

我が国の女性研究者の割合は年毎に増加している。しかし、まだ 14%程度であり、欧米などの 30～40%に比べて、非常に少ない。その理由は、どこにあるのだろうか？国際的に見ても、女性の地位が低い先進国として認識されている現状を変えていく必要がある。大学等の研究機関に所属する女性研究者の研究活動を支援する文部科学省の事業が、平成 18 年度からスタートした。この事業により、女性研究者へ向けた環境整備が進んできたことに加え、女性限定の採用人事など、ポジティブ・アクションが実際に行われるようになっている。女性研究者の採用が進むと、女性学部学生や女性大学院生が増加し、さらに、女性研究者が増加するといった正のスパイラルが実現することを、講演者は強く期待している。学長や役員のリーダーシップが発揮され、優れた女性研究者が国内外から採用されている例を紹介し、女性研究者が生き生きと活躍するために、国や、大学等の機関や、学会等のトップの強いリーダーシップの重要性を述べたい。また、女性研究者が活躍するために男性の意識改革と同時に、女性の意識改革も必要である。